

持続可能性教育としての共生日本語教育実習の可能性 —言語生態学的内省モデルの提案—

鈴木（清水） 寿子

学位取得年月：平成22年9月

取得学位名：博士（人文科学）

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】共生日本語教育実習、内省モデル、教師の成長、言語生態学、持続可能性教育
【要旨】

日本国内の在留外国人の数は1990年代から目覚ましい増加を続けている。受け入れ側である日本語母語話者、参入側である日本語非母語話者の間に立ち、学びの場を構築する日本語教師の育成が喫緊の課題となっている。本研究ではお茶の水女子大学大学院において2000年から実施されている共生日本語教育実習を、この課題に応える「持続可能性教育としての日本語教師養成プログラム」の実践と捉え、実習生の内省を見ることにより、プログラムの意義及び共生日本語教師の存在意義を明らかにすることを目指した。

これまでの共生日本語教育実習における実習生の学びは「内省モデル（Wallace1991）」を理論的枠組みとして分析されてきた。しかしながら、このモデルで共生日本語教育における学びを捉えようとするとき①他者の存在で自己の学びが開かれていく学びの様相が描けない点、②獲得目標が固定的な専門的能力に還元されてしまうという点に限界があった。そこで、人間同士の社会的相互作用を仲立ちする言語に着目し、多次的な関係の中での能力を生態学的に読み解く言語生態学を理論的背景として「言語生態学的内省モデル」を新たに策定した。言語生態学的内省モデルでは以下のように考える。

・実践と内省は、人々が人間生活を形作っている今この場である〈現実生態場〉の中に位置づく〈実践生態場〉、〈認識生態場〉における営みである。内省は内在化された他者との対話であり〈認識生態場〉において頭の中の言語（内的言語）を使用して実現する。

・〈実践生態場〉と〈認識生態場〉の往還である「言語生態学的内省サイクル」の展開は、生態学的リテラシー（想像力を持って自己の視座の中に他者の視座も保持し、自己の生き方と主体的関連の下に、自己を起点として視野を拡大しつつ捉えていく力）を醸成する。

第一部では、実習生32名が実習準備期間から終了後の3ヶ月間にわたって記述したジャーナルを分析した。その結果、実習生は〈認識生態場〉において《共生社会実現の懷疑》、《日本語教師の役割と課題検討》、《共生実習の意義の見出し》という3つの局面を展開していくことがわかった。また、実習生は実習を通じて《教室活動に対する視座》、《実習生のルーツに対する視座》、《日本社会に対する視座》の3つの視座を手に入れており、これらの視座が重なり合うことで共生日本語教育をめぐる〈現実生態場〉の見方が作られていたことがわかった。

第二部においては日本語非母語話者実習生1名を対象に、メタファー生成課題など複数のデータを用いて、実習生が得た生態学的リテラシーの内実を明らかにした。その結果、実習前は「正しい日本語」の抑圧を相対化できなかった実習生が、日本語運用力に頼らずに十全に活動参加する日本語非母語話者参加者の存在に自己を逆照射させながら、実習を経て「正しい日本語」の価値を相対することができていたことがわかった。実習終了3年後のインタビューの分析では、同じ実習生が、共生日本語教育で培った生態学的リテラシーを持続発展させ、日本語と母語である中国語の言語活動で周囲の他者と関係を築いている様子が明らかになった。当該実習生は多様なアイデンティティを發揮した生き方を実践することによって、日本人住民、外国人住民の連結する結節点である「類個の連結性」としての機能を果たしていた。

以上、「言語生態学的内省モデル」を用いた本研究の結果から、持続可能性教育としての共生日本語教育プログラムとは、「自己を起点とし、想像力を持って他者の視座も保持し、実習後も生態学的リテラシーを持続発展させる」という学びのあり方を追求するものであることを提示した。さらに、生態学的リテラシーを持続的に発展させながら学び続ける在野の共生日本語教師の育成によって日本語教育が日本社会に貢献することができる可能性を示唆した。

(すずき（しみず） としこ）